「レオパレス21」請負契約キャンセル続出で大赤字の惨状

実業界

8 2011
The Analytical Magazine for Economics
創刊60周年
毎月1日発売
昭和27年2月28日第三種郵便物認可
毎月1回1日発行 平成23年8月1日発行 第990号

救命医療機器AEDの相次ぐ故障で傷つく「日本光電」の信用

■「日本生命」手詰まり "拡大戦略"の焦燥

■"違法状態"を解消できない急成長携帯ゲーム「グリー」無料商法

歯で分かるカラダ・ココロのSOS

未病の憂い

歯科医が語る現代版養生訓

大なり小なり〝ヤッカイゴト〟を抱え、日常を生きる現代人。歯のトラブルが映し出す現代人、日本社会の〝未病の憂い〟を綴る…。

〝5月病〟というコトバを以前ほど聞かなくなった。

春先に新たな環境（学校や職場）で生活を送ることになった若者が、環境に馴染めず、不調を訴えるということが、ある種〝年中行事〟になってしまったからか、あるいは、心の病が珍しいものではなくなってしまったからか、理由は色々だろう。

私のクリニックにも、カラダだけでなくさまざまな不調を訴える患者さんが増えている。

5月病と言う言葉を聞かなくなった時期と、さまざまな不調を訴える患者さんが増え始めた時期は、合致しているような気がする。

今は、心の病は〝適応障害〟というコトバでひとくくりにされる時代だ。

〝適応障害〟とは、現代社会が効率を優先し、勝手に作りあげてきたいろいろな仕組みに、ヒトが適応できなくなった時の状態を示す。

そもそもヒトは、考え方も違えば、歩む速さも違うし、歩幅も異なる。それが個性ということだろう。ましてや置かれている立場や背景も人それぞれだ。

今や〝個性〟は現代社会に押しつぶされようとしている。

少し前は、うつ病などを〝心の風邪〟と称する向きもあった。

風邪のようにクスリを飲んで、お大事にという具合に症状が改善されればよいが、心の病は、そう簡単にはいかない。

ストレスが要因であるとされるが、うつ病やパニック障害とされる患者さんの歯の状態は、かなり悪い。実際に、歯の状態を見れば、少なからぬ歯科医は、その患者さんがストレス過多かどうか分かる。

虫歯もなければ、歯のケアも万全なのに、ストレスで過度な歯軋りを続け、歯が摩耗し、原因不明の歯痛で来院される患者さんも、かなり増えてきている。

このように、心やカラダのストレスが原因で、口腔内（口の中）・顎・顔面領域に現れる不快な症状を「口腔心身症」という。

現代の社会構造が生み出した新しい病気である。

この病気の多くの症状には自律神経が関与していると考えられるが、なかなか環境の変化に合わせられない現代人のココロやカラダの〝免疫力〟の低下もその一因だろう。

虫歯でもなく、歯肉炎でもない、さて原因が分からないと痛み止めを処方されるも、痛み止めと言うのは、飲み続けて良い物ではないし、次第に効きが薄れてゆく。

それでも患者さんの痛みは取れず、歯科医も患者さんご本人も困り果て、当院へこられる方も少なくない。（編集部注・筆者の歯科クリニックでは心療歯科（ストレス）外来を設け、治療が行われている）

歯科で心身症が治るのか、と疑問をお持ちの方もいるだろう。

歯科医の側でも、ストレスで起こるこの不快な症状や疾患の存在が認知されるようになって日が浅い。一般の方々が疑問を持たれるのも、当然かもしれない。

口腔心身症は、一見元気そうでも、しばしば強い口腔内の〝異常感〟にさいなまれ、生活に支障をきたしており、夕方に症状が悪化する、通常の歯科治療では症状が改善しない、何かに集中している時は症状が軽減する、といった具合に、患者さんに共通する症状が類型化できるほど、一般的なものだ。私のクリニックにも全国から患者さんがこられる。

カラダやココロの不調、〝SOSサイン〟が目に見える形で現れるのが口の中だが、原因不明の歯痛を訴える患者さんは、残念なことだが、増えることはあっても、減ることはないように思う。

病んだ社会と、そこで苦しむ人々の〝未病の憂い〟を歯科医の立場から綴っていきたい。

亀井英志（かめい・ひでし）

1951年群馬県生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。